

程度副詞が持つ数量限定機能の解釈について

佐久間 司郎*
shirogb250@hanmail.net

＜目次＞

- | | |
|--------------------|-------------|
| 1. はじめに | 3.2 数量限定の解釈 |
| 2. 先行研究 | 4. 調査/分析 |
| 2.1 程度副詞の数量限定 | 4.1 調査方法 |
| 2.2 程度副詞に隣接する領域の研究 | 4.2 分析 |
| 2.3 本稿の考え方 | 5. まとめ |
| 3. 程度副詞と数量限定における解釈 | |
| 3.1 対象とする程度副詞 | |

主題語: 程度副詞(degree adverb), 数量限定(quantity modify), 意志(will), 自動詞(intransitive verb), 他動詞(transitive verb)

1. はじめに

程度副詞の主たる機能は後接する成分の程度性を限定することである。

(1) コノ映画ハ【トデモ/ヒジョウニ/カナリ/ソウトウ/チョット/スコシ】オモシロイ¹⁾。

(1)はそれぞれの程度副詞が「映画のおもしろさ」の程度がどのくらいであるのかを限定している。しかし程度副詞の中には(2)~(5)のように、後接する成分の程度性ではなく、数量性を限定する種類のものもある。

(2) 人ガ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】イル。

(3) ゴ飯ヲ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】食ベタ。

* 東明大学校 教養教育院 助教授

1) 本稿における用例は、断りがない限り国立国語研究所が提供するKOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から抽出したものであるが、カタカナ表記のものは著者による作例である。

- (4) 昨日ハ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】遊ンダ。
 (5) ソノ期間ハ、街デ彼ヲ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】見カケタ。

(2)~(5)を見るとわかるように、程度副詞が限定する数量性は多岐に渡る。(2)の程度副詞は「主体の数量」を、(3)は「対象の数量」を、(4)は「動きの量」を、(5)は「度数」を表している。

ではこの程度副詞の表す数量性の違い——つまり解釈の違い——は何に起因するのだろうか。共起する動詞によって解釈が変わってくると推測されるが、(6)(7)はそれぞれ同じ動詞(「見る」)と共起しているにも関わらず、程度副詞の解釈に違いが生じている。(6)の「ダイブ」は「対象の数量」を。(7)の「チョット」は「動きの量=(時間量)」を表している。

- (6) コノ監督ノ映画ハ、ダイブ見タ。
 (7) ソノ映画ハ、チョット見テヤメタ。

程度副詞の数量性を主テーマとして掲げる研究はあまり見当たらない。程度副詞が数量限定をおこなうということは昔から指摘されてきてはいるのだが、その指摘だけにとどまるものが多い。本稿はそういった背景をもとに、程度副詞の数量限定の解釈の違いは何に起因するものなのかを考えていくことを目的とする。

2. 先行研究

2.1 程度副詞の数量限定

上でも指摘したように、程度副詞に数量限定機能があることは以前からたびたび言及されてきた。例えば程度副詞の代表的研究である工藤(1983)でもいくつかの程度副詞をもって「量副詞の用法に立つものが(中略)少なからず存在する」と指摘されている(p179)。しかし、数量限定に関する言及はこれだけである。

森山(1985)は(8)のようなテストを提示し、この空欄に入ることができる程度副詞——つまり数量限定機能がある程度副詞——を「量的程度副詞」、入らないもの——つまり数量限定機能がない程度副詞——を「純粹程度副詞」と分類している(p61)。

(8) 金が_____ある。

例えば「カナリ、ズイブン、チョット」などは(8)に入れると自然な文として成立するため量的程度副詞となるが、「ヒジョウニ、タイヘン、ハナハダ」などは(8)に入れると文が成立しないため純粹程度副詞ということになる。

また森山(1985)は(9)~(11)の例文を挙げて、量的程度副詞が数量を限定する場合にさまざまな解釈になることを指摘している(p64)。

(9) かなり死んだ

(10) かなり待っていた。

(11) 私はあちこちで随分彼をみかけた。

(9)の「かなり」は「主体の量を示す」とし、(10)の「かなり」は「動きの期間が量としてとりあげられ」たものであるとし、(11)の「随分」は「回数」を表すとしている。このような解釈の違いについては「格体制の問題」であったり共起する動詞の性質の問題であったりということが述べられているが、総括的な指摘にとどまっている。

仁田(2002)も数量限定文脈で使われる程度副詞がさまざまな意味を持つことを指摘していることに関しては森山(1985)と同じであるが、いくつかの用例を提示し体系的な指摘をおこなっている。その内容をまとめると、程度副詞の数量限定には大きく分けて「動きの量」に関わるものと関わらないものの二つがある。そして動きの量に関わるものの中には「持続性を持つ動き」と「持続性を持たない動き」があり更に「持続性を持つ動き」を表すものの下位項目として「時間的広がり」を表すものと「空間的広がり」を表すものが存在するとしている(pp.184-187)。しかしこれもどういう場合においてどのような意味を持つのかに関する指摘はない。

佐野(2006)は仁田(2002)を受けて進められた研究であり、動きの量を表す数量限定場面において表れる程度副詞の解釈の多様性を、共起する動詞のタイプを指定することによって説明している。その結果を表にしたのが表1である。

表 1：佐野(2006)による程度副詞の意味解釈と共起する動詞タイプ

意味解釈	動詞のタイプ
動きの量	・均質的な動きの過程を持ち、動きが加えられることによって段階的に動きの量が増える動詞 ・暫時的な変化を表す主体変化動詞
時間量	・動きの結果を主体的に維持する動詞 ・進展的な変化の過程を持たず且つ結果が持続する変化動詞 ・動きの量を表すことができない動詞
度数	・一時点的な動きを表す動詞
主体・対象の数量	言及なし

結語として「最も中心的な用法は「動きの量」であり、共起する動詞の性質や文脈によって「動きの量」を表すことができない場合に、「時間量」や「度数」を表す解釈へとずれこむ」としている(p80)が、「動きの量」を表すことができない場合がどのような場合なのかは歯切れが悪くはつきりしない。また、動きの量を表さない場合の数量限定については一切触れられていない。

2.2 程度副詞に隣接する領域の研究

影山(1993)では「たくさん」と動詞の限定関係について触れられている。「たくさん」は量副詞であり程度副詞とは性格を異にする部分もあるが、量的限定をおこなうという点では類似点もあり本稿の論点に関しても多くの示唆を含んでいると考えられる。

影山(1993)は動詞を「他動詞」「非対格自動詞」「非能格自動詞」にわけ、それぞれの動詞が「たくさん」と共起する際の解釈の違いについて論じている(pp.54-55)。(12)～(14)の例を見られたい。

(12) たくさん飲んだ＝飲んだ量がたくさん≠飲んだ人がたくさん 【他動詞】

(13) たくさん生まれた＝生まれた子供がたくさん 【非対格自動詞】

(14) たくさん遊んだ＝遊んだ量がたくさん≠遊んだ人がたくさん 【非能格自動詞】

これらの例から「たくさん」は、他動詞と共起した場合は目的語の数量を、非対格自動詞と共起した場合は主語の数量を、非能格自動詞と共起した場合は行為の量を表していると

いうことを論じている。

井本(1999)は「ほど節」が各種動詞と共起した場合の解釈の違いについて研究したものである。まず、「ほど節」が表す意味には(15)~(20)のように6種類あると示している(pp.45-47)。

(15) おなかを壊すほどアイスクリームを食べた。【目的語が大量】

(16) 庭を埋め尽くすほど花が咲いた。【主語が大量】

(17) 背中が赤くなるほど次郎を叩いた。【事象回数が大量】

(18) 足がつるほど泳いだ。【行為の量が大量】

(19) 見違えるほど痩せた。【非常の程度】

(20) 軒先に届くほどジャンプした。【1回の強い動き】

そして、どういう場合においてどの解釈になるのかを有界性²⁾という概念をキーワードに論じている。結論として「ほど節」の解釈は主文動詞の意味クラスごとに持つ有界性と内部構造に関する素性と関連し、その読みは動詞および主文事象の概念素性の計算から導出される」と述べた(p65)。つまり「ほど節」の解釈に影響を与えるのは「動詞」と「文の意味」だということである。

2.3 本稿の考え方

ここまで関連する先行研究を概観した。ここからわかることは以下の三点である。

- i) 程度副詞が数量限定をおこなう場合にはさまざまな解釈がなされる。
- ii) しかし、その解釈が何に起因するかに関する確定的な研究はまだない。
- iii) ただし、解釈の多様性は共起する動詞と文意に影響を受けているだろうと推測される。

以上のことから本稿では以下のような構成をとり、程度副詞の数量限定の解釈の多様性が何に起因しているかを明らかにしていく。

3節では本稿で対象とする程度副詞の範囲を設定し、数量限定がどのように解釈される可能性があるかを検討する。4節では程度副詞が数量限定をおこなっている実際の用例を収集し、解釈の違いごとに検討をおこない分類化を進める。5節では得られた結果をまとめる。

2) 有界性とは井本(1999)によれば「物質的実体と事象がそれ自身境界を持つかどうかという含意に関する素性である」(p.49)。井本(1999)はこれを提案したJackendoff(1992)の議論によっている。

3. 程度副詞と数量限定における解釈

3.1 対象とする程度副詞

前述したように数量限定機能を有する程度副詞は「量的程度副詞」と呼ばれる。まず分析を進める前にこの語の範囲を設定しておかなければならない。本稿では(21)の6語を考察の対象としたい。研究によってその範囲は異なるがまだ統一された見解がない³⁾。しかし(21)に挙げた語は大抵の研究において「量的程度副詞」と認められているものであるとみてよく、異論を差し込まれる余地がないと考えられる。

(21) カナリ・ズイブン・ソウトウ・ダイブ・スコシ・チョット

3.2 数量限定の解釈

程度副詞の解釈には多様性があることを指摘したが、その解釈は大きく二つに分かれる。すなわち「名詞の数量を限定する」場合と、「それ以外の量を限定する」場合である。(1)(2)は前者、「名詞の数量を限定する」場合の例である。

(1) 人ガ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】イル。

(2) ご飯ヲ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】食ベタ。

(1)は「いる人」の数、(2)は「食べたご飯」の量が各種程度副詞によって限定されている例である。これらの例からもわかるように「名詞の数量を限定する」場合は、(1)のように主体を限定する場合と、(2)のように対象を限定する場合の2種類に分かれる。

一方(3)(4)は(1)(2)のように何らかの名詞の数量の大小を表してはいない。

(3) 昨日ハ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】遊ンダ。

(4) ソノ期間ハ、街デ彼ヲ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】見カケタ。

3) 例えば北原(2013)では「結構」「割合」「マアマア」の三語は「量的程度副詞」ではないとしている(pp.35-36)。しかし佐野(2008)ではこれらは「量的程度副詞」と認められている(p.11)。

(3)は「遊んだ」量がどのくらいか、(4)は「見かけた」回数がどのくらいかを表していると言える。本稿では(3)を「動きの量」とし、(4)を「度数」とするが、(1)(2)のようにある特定の名詞の数量を表しているわけではない点で共通している。

以下、本節で述べた解釈の概要を詳しくみていく。

3.2.1 主体の数量

(22) 人ガカナリイル

(23) 貯金ガソウトウアル

(22)は「人」の数、(23)は「貯金」の量(=金額)がそれぞれ「カナリ」「ソウトウ」という程度副詞によって限定されている例である。このように程度副詞が主にガ格で表示される名詞句の数量を限定する解釈を「主体の数量」と呼ぶことにする。

このタイプは主体である名詞をX、動詞をYと想定した場合、「Y Xの数量」が程度副詞で表されている。つまり(22)の場合は「イル(Y)人(X)ノ数」が「カナリ」という程度副詞で表されているということであり、(23)の場合は「アル(Y)貯金(X)の量(額)」が「ソウトウ」という程度副詞で表されているということである。

3.2.2 対象の数量

(24) 水ヲズイブン飲ンダ

(25) 作品ヲチョット作ッタ

(24)は「飲んだ水」の量を、(25)は「作った作品」の数をそれぞれ「ズイブン」「チョット」という程度副詞が限定している例である。このように主にいわゆる目的語の位置にある名詞句の数量を限定する解釈ができるものを「対象の数量」とする。

このタイプは対象となる名詞をX、動詞をYと仮定した場合、「Y Xの数量」が程度副詞によって表されている。すなわち(24)の場合は「飲ンダ(Y)水(X)ノ量」が「ズイブン」という程度副詞で表されるということであり、(25)の場合は「作ッタ(Y)作品(X)の数」が「チョット」という程度副詞で表されるということである。

3.2.3 動きの量

(26) 昨日ハダイブ泳イダ

(27) 家ノ前デスコシ待ッタ

(26)は「泳いだ量」を「ダイブ」が、(27)は「待った時間の量」を「スコシ」がそれぞれ限定している例である。

佐野(2006)では(26)の「動作量」と(27)の「時間量」は別のカテゴリーとして扱っている。しかし本稿では「動作量」と「時間量」を特に区別せず、「動きの量」という括りの中に入れてい—この理由については後ほど詳説する—。ちなみに仁田(2002)も「空間量」を表す用法と「時間量」を表す用法があることを認めつつも、「空間量の増大は必然的に時間量の増大を招来する」(p187)ということで積極的にこの二つの用法を区別しようとはしていない。

3.2.4 度数

(28) 街デ彼ヲズイブン見カケタ

(29) 当時ハ文学賞ニカナリ応募シタ。

(28)は「彼を見かけた回数」を、(29)は「応募した回数」をそれぞれ「ズイブン」「カナリ」という程度副詞が限定している例である。このようにそれぞれの事象の回数量を表すものを「度数」と呼ぶことにする。

4. 調査/分析

4.1 調査方法

程度副詞の数量限定の解釈の違いを生み出す要因を探るため、実際に使われている用例を収集する。具体的には国立国語研究所が提供している「KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」」を用いる。集まった用例を3節で提示した基準に沿って分類し、それぞれの特徴を抽出する。このコーパスを用いると多様なジャンルの媒体からの用例を集める

ことができるが、本稿ではインターネット上の文章や国会議事録からの用例抽出はおこなわず、出版された本と雑誌・新聞に使われた用例を中心に集めることにした。

4.2 分析

4.2.1 「主体の数量」を表すタイプ

まず、「主体の数量」を表す場合に共起している動詞のタイプについて考えてみたい。先行研究でも挙げたが影山(1993)においては、量副詞「たくさん」が非対格自動詞と共起した場合「たくさん」は主語の数量を表すと述べられている。実際、収集した用例に現れた動詞を一瞥してもほとんどは非対格自動詞であると考えられる。しかし非対格自動詞と非能格自動詞の分類に関してはまだ完全な合意があるとは考えにくい部分があるので、この用語の使用は避けたい。そういったことから他の言葉を使ってこのタイプの程度副詞と共起する動詞に共通している要素を考えてみると、それは全て意志性がない自動詞だということである。(29)~(32)の例を見られたい。

- (29) 「選挙目当てのパフォーマンスではないか」と疑問視する意見もずいぶんあった。
- (30) 葬儀場から家まではだいぶある。
- (31) 彼のデザインや建築に見覚えのある人は相当いるのではないだろうか。
- (32) 現実には開放的チャネルと変わらないケースもかなりみられ、選択した流通業者との関係の維持に多大の努力を必要とする。

(29)~(32)は動きの量と関わらず、主体の量を表しているケースである。「ある」や「いる」などが代表的な例と言えるが、(32)のような「見られる」といった動詞もこのタイプに入ると考えられる。これらに意志性が含まれないのは言うまでもない。

その他には動詞が「~ている」の形態で差し出されているものが多く見られた。(33)~(36)である。

- (33) 中国から安い物資が相当入ってきているらしく、活気にあふれている。
- (34) 「それじゃあ大分抜けてるぞ。フライト代以外に、レストランでの食事代やルームサービスを取った代金も払っていないな」

(35) 絵巻物を接写で撮った写真がかなり含まれていることがわかる。

(36) みそ汁とご飯をちよつとだけよそい、大皿の端に少し残っていた青菜の炒め物といっしょに、かきこむように食べる。

「～ている」の形で提示されている動詞も全て意志性がないものが現れている。影山(1993)では「たくさん遊んでいる」のように「ている」が付くと行為者の数を表せる」という指摘があり、意志性を持つ「非能格自動詞」が「～ている」の形をとって主語の数量を限定するケースがあることが指摘されている(p55)が、今回の調査ではこのようなものは見当たらなかった。

「ある」「いる」でもなく「～ている」の形態をとっていない動詞もそれなりに見られた。仁田(2002)は程度副詞の数量限定について「個体の数量を限定する」ものと「動きの量を限定する」ものに分けているが、「ある」や「いる」といった動詞でない限り「個体の数量も、動きの量に関連してくる」と指摘している(p185)。(37)～(40)もそういった類のものであり、仁田(2002)が言うように「個体の数量限定であるとともに、既に動きの量に対する情報を含んでいるもの」(p185)である。また、これらの動詞もすべて無意志性の動詞である。

(37) これまであった商品戦略への不満はだいぶ消えた。

(38) 負傷者は多数、死者もずいぶん出た。

(39) 道端の樹木の枝はかなり折られ、熔岩の苔も容赦なく踏みつぶされた。

(40) 雪が相当ふっていることがわかります。

さて、ここまで「主体の数量」を表すタイプにおいて共通するのは共起する動詞に意志性がないものであるということを見てきた。しかしその反例も存在する。(41)～(42)である。

(41) そのかいあって、退院までにはかなり動くようになっていましたが、一時は左手で字を書くようにしようとまで考えました。

(42) その時になってやっと父の表情が少し動いた。

(41)(42)の「かなり」「少し」が限定しているのは主体である「右手」「父の表情」の数量ではなく、「右手」や「父の表情」が動いた量(度合い)である。つまり、この「かなり」「少し」という程度副詞が限定しているのは本稿でいう「動きの量」に該当するのである。

そうすると「主体の数量」を表す場合の条件をもう少し細かく設定しなければならない。

結論を先取りすると、程度副詞が「主体の数量」を表すのは意志性のない動詞と共起し、かつ主体の数量が複数であつたり量的に広がりがあることを想定できる場合に限る。

(29)~(40)に主体として用いられている名詞は、全て複数ないし量的な広がりが見られるものである。逆に(41)(42)はそれが想定できない。ある特定の人間の「右手」や「表情」が一つしかないのは当然である—「表情」はいくつもの表情に変わる可能性があるが、人間が同時に見せられる表情が複数ということとはあり得ない—。

程度副詞は数量を限定するのであるから、限定されるべき概念に数量的広がりが含まれていなければ当然数量的な限定をおこなうことはできない。例えば(43)(44)を見比べてみる。

(43) 人ガカナリイル。

(44)*日本ノ総理大臣ガカナリイル。

(43)と(44)は「名詞がかなりいる」という構造では同じだが、(44)は非文となる。それは日本の総理大臣は一人しかいないというのが我々の間の経験的知識として共有されているからである。つまり(44)の主体(「日本ノ総理大臣」)は、概念的に数量的広がりが見られないため、「かなり」による限定を受け得ないのである。

(41)(42)は主体に数量的広がりが見られないため主体の数量を限定することはできないが、後接する動詞には数量的な広がりが見られているため、結果として解釈がずれ込み、「動きの量」を表すことになる。(45)~(48)の例を見られたい。

(45) そうすると五年後くらいには世の中だいぶん変わったなあと言える状況が生まれると思います。

(46) 六年生にもなると、子どもの考える力はずいぶんのびているよ。

(47) ジェンナーによって確証された種痘法は、十九世紀はじめからかなり広まって天然痘予防に効果を発揮した。

(48) 長谷部選手はちょっと太ったように見えますね。

(45)~(48)で共起している動詞は、いわゆる「主体変化動詞⁴⁾」である。佐野(2006)において、程度副詞とこれらの動詞が共起した場合「動きの量」を表すとされた(p86)のであるが、

4) 主体変化動詞については佐野(1998)において詳細な分類や説明がなされている。

この主体変化動詞も自動詞でありまた意志性が確認できないものである。ならば「主体の数量」を限定しなければならないわけだが、ここではそうではない。それはやはり主体に数量的な広がりがあることが確認できないからである。(45)は「世の中が変わった」度合いが「だいぶ」なのであり、「変わった世の中」の数量が「だいぶ」であるとは言えない。(46)も「子どもの考える力ののびている」度合いが「ずいぶん」なのであり、「のびている子供の考える力」の数量が「ずいぶん」という程度副詞により限定されているわけではない。(47)(48)も同じである。

一方同じような変化動詞—無論「主体変化動詞」ではないが—でも(49)~(51)は(45)~(48)とは異なる。

(49) 最近は新しいテクノロジーをどんどん導入しているので、技術系の人員がずいぶん増えている。

(50) 友達や先生も少し増えるかもしれないから、多めに作ってもらえると有り難いな。

(51) もらえる年金額はかなり減りますが、無節操な保険料率アップは、避けられることになるわけです。

(49)~(51)の主体として用いられている語は数量的な広がりがあることが想定されやすい語である。この場合は「主体の数量」を限定していると考えられる。(49)は「増えた技術系の人員」の数量が「ずいぶん」という程度副詞によって限定されていると見てよいだろう。(50)(51)も同じである。

以上ここまでで得られたことをまとめると、「主体の数量」を限定するのは主体にあたる名詞に数量的な広がりが含まれており、共起する動詞に意志性がない場合であると結論づけることができる。

4.2.2 「対象の数量」を表すタイプ

次に程度副詞が「対象の数量」を限定する場合について見ていこう。当然のことながら、このタイプにおいて共起している動詞はすべて他動詞である。(52)~(55)がその代表的な例と言えるだろう。

(52) 幕府が橋をかけようとしたことに猛烈に反対し、お金もだいぶ使ったらしいことがわかつ

てきた。

- (53) そのほか、会食や懇談の機会なども随分作ってもらった。
- (54) 原爆にかかわっての本はかなり読んだつもりだったが、
- (55) 夕食すらもカップ焼ソバを少し食べただけで、休みを取ろうとしなかった。

(52)は「使ったお金」の数量(金額)を「だいぶ」という程度副詞が限定している例であり、(53)も「作ってもらった会食や懇談の機会」の数を「随分」という程度副詞が限定している例である。(54)(55)も構造としては同じである。

「~ている」の形をとるものも多く見られた。この場合も共起する動詞のタイプに変わりはないし、表す意味も変わらない。(56)~(59)がその例である。

- (56) 地域に住んでいない人が虫食いのに土地をかなり持っています。
- (57) 見渡してみたら意外と近所に、無農薬野菜をちょっと作っている、といった兼業農家の方もいらっしやることがあります。
- (58) 武士がもっとも多く、農工にいたってはほとんど描かず、商人はかなり描いている。
- (59) ヤマギシリョウちゃんと、ビールを差しつ差されつで、ずいぶん飲んでいるようです。

しかし程度副詞が他動詞と共起した場合は全て「対象の数量」を表すというわけではない。(60)~(61)である。

- (60) 会計士はちょっとと見ただけで、ベンソンが怪しいと思ったらしい。
- (61) 宅配便だと言われ、彼女はチェーンをかけたまま、ドアを少し開けて、『じゃあ、そこに置いといて下さい』と、言ったそうです

(60)は「会計士はベンソンをちょっと見た」という構造だが、「ベンソン」というのは人名であるため、「見たベンソン」の数が「ちょっと」とは当然言えない。これは本稿の分類で言えば「見た」時間量を表しているため、「動きの量」に分類されるものである。(61)にしても極めて特殊な場合を除いて「開けたドア」の数が「少し」という解釈は成り立たない。これも「少し」が表すのは「開けた」空間量であるから「動きの量」に区分されるべきものである。

これもやはり、対象となる名詞に数量的な広がりが見出せないためだろう。(60)の「ベンソン」は一人だし、(61)の宅配便が来たときに開ける「ドア」も一つだろう。数量的な広がりが見出せないならば、当然その数量概念を限定するのも難しい。その理屈は3.2.1で既に

述べた。(60)と(62)を比べるとその違いが明確になる。

(62) ケラさんの作品は好きで、かなり見えています。

(62)は「見ているケラさんの作品—「ケラさん」は演出家であり、ここでいう「作品」とは「演劇」のことを表している—」の数が「かなり」という程度副詞によって限定されていると解釈できる。つまり(62)は「対象の数量」を表している。(60)と(62)は程度副詞と共に起る動詞として同じ「見る」が用いられているわけだが、(62)は対象となる名詞「作品」に数量的な広がりがあるために「対象の数量」を表しており、一方の(60)の「ベンソン」は数量的な広がりがないため「動きの量」の解釈にずれ込んでいるのである。

以下に他動詞と共に起しているが対象の数量を表していない例をいくつか提示しておく。

(63) そんなある日、蒸留したままで薄めていないという原酒を飲む機会があった。これこそ課税されていない懐かしの密造酒ということになる。口の中でふわんふわんととけて、香りがたつ。六十度くらいあるらしいが、かなり寝かせてあるのだろうか、

(64) ふかふか、つるつるして、ちょっと触ったら壊れてしまいそうな、新しいキノコのように見えた。もともと自費出版するつもりでした。

(65) 重心を左に少し移し、身体を左に流す。

以上より「対象の数量」を限定するのは、対象にあたる名詞に数量的な広がりがある場合であり、なおかつ共に起る動詞が他動詞である場合であるということが出来る。

4.2.3 「動きの量」を表すタイプ

ここまでは程度副詞が名詞の数量を表すタイプであった。ここからはそれ以外のものを見ていく。

ここまでの議論において「意志性のない自動詞と共に起し、なおかつ主体となる名詞に数量的な広がりがない場合」と「他動詞と共に起し、なおかつ対象となる名詞に数量的な広がりがない場合」の二つの場合は「動きの量」を表すということが明らかになっている。

それ以外の動詞のタイプとしては意志性を有する自動詞が挙げられるが、この動詞と程

度副詞が共起した場合には「動きの量」を表す。これに漏れる例は見つけられなかった。有意志性の自動詞が程度副詞と共起した場合、「動きの量」を表すのは間違いないようである。(66)~(68)に用例を挙げる。

(66) 市木君はコンビニでだいふ働いたのよね。

(67) 入っても かなり歩くことになるため、訪れる人は非常に少なく、

(68) 少し走ったところで、アブディラーヒがまた車を止めた。

(66)は「働いた」量を、(67)は「歩く」量を、(68)は「走った」量を、それぞれ「だいふ」「かなり」「少し」といった程度副詞が限定していると言える。何らかの名詞の数量を表していないという点で、「主体の数量」「対象の数量」を表すタイプとは異なる。

(66)~(68)を見てもわかるようにこれらの程度副詞が表す「動きの量」は多岐にわたる。(66)は「働いた」期間を表しているといえるし、(67)(68)は「歩く」「走った」距離または時間を表していると言える。(67)や(68)が「距離」(=「空間量」)を表しているか、「時間」(=「時間量」)を表しているかははっきりしない。歩いたり走ったりする時間が増えれば当然距離も増えることになるためだろう。仁田(2002)でも「時間量と空間量は截然と分かれるわけではない」「空間量の増大は必然的に時間量の増大を招来する」などと述べられている(p187)。要するに程度副詞の数量限定の「動きの量」を表す下位分類として「空間量」や「時間量」というカテゴリーを別に一つずつ設けることはあまり意味がないように思われるのである。

もちろん結果的に、文意からして確実に「空間量」を表しているとか「時間量」を表している例というのは存在する。(69)(70)は前者、(71)~(74)は後者の例であるが、どちらにしても動詞の動きの量を限定しているのは同じである。

(69) 1枚ずつ少しずらして重ねる。

(70) たいていの場合、穴の端を少し削ってやるだけですんなり入る。

(71) 顔を離して、また少し見つめ合います。

(72) チョコレートのディップが考案されるまでには、まだだいふ待たなければならなかった。

(73) 「やあ」と手を挙げて、「ずいぶん寝たね」と目を細めた。

(74) みんなして、ここでちょっと休むのが、一番よさそうに思うが。

以上より、程度副詞が動きの量を表すのは「意志性のない自動詞と共起し、なおかつ主体

となる名詞に数量的な広がりが見定できない場合」と「他動詞と共起し、なおかつ対象となる名詞に数量的な広がりが見定できない場合」と「有意志性の自動詞と共起した場合」であると言える。

4.2.4 「度数」を表すタイプ

森山(1985)では、「動き一回ではその量がとりだせない」、「死ぬ、結婚する、みかける」等の動きでは、くりかえしによる回数が、その量となる」として(75)の例が挙げられている(p64)。

(75) 私はあちこちで随分彼をみかけた。

(75)の「随分」は「彼をみかけた」度数を限定している。また佐野(2006)も程度副詞が「動きの量を表すことができない一時点的な動きを表す動詞と共起した場合などには、度数を表す解釈も可能になる」としている(p82)。

森山(1985)のいう「動き一回ではその量がとりだせない」動詞と佐野(2006)のいう「動きの量を表すことができない一時点的な動きを表す」動詞は同じものを指していると見られる。しかし、程度副詞がこのような「一時点的な動きを表す動詞」と共起するからといって必ずしも「度数」を表すというわけではない。

(76) 順子 私もうごろになって、結婚したんですよ。ちょっとの間でしたけど。

小沢 はいはい。

順子 ちょっと結婚して、戻ってきてから、今度はマジックをやったんです。

(77) 「お婆さんは彼女を見て、すぐに誰だか分かったんですか」「いえ。別に話をしたわけと違う、ちょっと見掛けただけですし。

(76)(77)の「ちょっと」は「度数」ではなく、「動きの量(時間量)」を表している。このような例から、程度副詞が「一時点的な動きを表す動詞」と共起した場合でも「度数」を表す場合とそうでない場合があることがわかる。

また「一時点的な動きを表す」動詞以外の動詞と程度副詞が共起した場合でも「度数」を表すことは可能である。

(78) ソノ映画ハかなり見タ。

「見る」という動詞は「一時点的な動きを表す」動詞ではない——時間的な幅を持った動詞——と考えられる。しかし(78)の「かなり」が表しているのは明らかに「その映画を見た」度数であらう。

ただ「一時点的な動きを表す」動詞以外の動詞が度数を表すのは難しい場合が多いのも確かである。例えば、ある程度時間的な幅を持った動詞である「走る」と程度副詞が共起した(79)である。

(79) かなり走ッタ。

(79)の場合、「かなり」は「走った」量を、つまり「動きの量」を限定していると見るのが普通である。しかし他の成分を付加した(80)となれば「かなり」の解釈も変わってくる。

(80) 高校生ノ頃ハ、コノ運動場をかなり走ッタ。

(80)の「かなり」は「この運動場を走った」度数を表していると考えられる。

ここまで見てきたことから、程度副詞が度数を表すのは単純に共起する動詞のタイプよりも、意味的な部分が大きいのではないかと考えられる。収集した実例を見てみよう。例えば(81)である。

(81) 実はオットの両親の車をずいぶん借りました。

この「ずいぶん」は何を限定しているのだろうか。「車を借りた」度数とも考えられるし、「車を借りた」期間(=時間量)であるとも考えられる⁵⁾。しかし、(81)の前後の文脈をもう少し検討してみると意味がはっきりする。

(81)' 私たちは現在車を持っていないのですが、工事中、特に壁塗りの間は、実はオットの工事

5) 共起している動詞は「借りる」という他動詞であり、対象にあたる名詞は「オットの両親の車」である。この名詞は可能性としては数量的な広がりを想定し得る名詞であるが、「ずいぶん」という語を以て限定できるほど車を所有しているということは特別な場合を除いて考えにくい。そのため「借りたオットの両親の車」の数量が「ずいぶん」であるという解釈は排除される。

中、特に壁塗りの間は、実はオットの両親の車をずいぶん借りました。オットの実家の駐車場までマンションから歩いて5分ほどなので、本当に便利でした。なにしろ、壁塗り生活でほとんど疲れ果てて、という毎日で自転車通いはできなかった、というのが本音です。

(81)'を熟読してやっと「ずいぶん」が度数を表していることがわかる。佐野(2006)によると「その動きが持続すると考えられる期間よりも長い期間を表す成分と共起した場合、繰り返される動きと捉えやすく、度数の解釈がしやすくなる」(p80)という指摘があるが、(81)'の場合「壁塗りの間」という「その動きが持続すると考えられる期間よりも長い期間を表す成分」との共起は度数の解釈を決定づける要因にはなっていない。度数の解釈を決定づけるのはむしろその後ろに現れる「オットの実家の駐車場までマンションから歩いて5分ほどなので、本当に便利でした」という部分である。この部分から「何回も(ずいぶん)車を借りた」ということがわかるのである。

要するに、程度副詞が度数の解釈をおこなっているかどうかは共起する動詞の種類等の統語的な問題ではなく、意味的な問題なのである。前後の文脈を検討してようやくそれが度数の解釈であることがわかるのである。

またもう一つ指摘しておくべきことは、程度副詞が「主体の数量」「対象の数量」「動きの量」を表す場合に比べて「度数」を表す用例の絶対数が比較にならないほど少ないということである。本稿において入手できた「度数」の実例は既出の(81)を含めてわずか4例のみであった。(82)は佐野(2006)では度数を表す例として提出されたものである。

(82) 後年、僕は老いはじめた父が先妻の仏壇の前で肘枕を立てて寝そべっている姿をズイブン見かけたものである。

(82)の「ズイブン」は確かに「見かけた」度数を表している。しかしこの「ズイブン」はもとの用例では「しばしば」だったものが、著者によって「ズイブン」に書き直されたものである。そのような改変が加えられた例文が他に4例あり、原文そのまま差し出されているのは1例のみしかない。

佐野(2006)が度数を表す用例のほとんどを改変して提出したというのは、それだけ程度副詞が度数を表す用例の数が少ないということに他ならない。確かに改変された一つまり程度副詞に入れ替えられた一後の例文は自然な文なのだが、実際には度数を表す場合の語

の選択に程度副詞はあまり採用されないようである。

普通、度数を表す場合には先に挙げた「しばしば」や「何度も」「数回」「幾度か」いったような語が用いられる。(83)~(85)は佐野(2006)が提示した用例である。

(83) 学生らは赤城山をバックに「ファイト、ファイト」と大きな声を出しながら何度も走った。

(84) 加藤さんの冬のハヶ岳山行記録を、ぼくは数回読みました。

(85) 稽古も幾度か覗かせてもらい、どのように仕上がるのかと、多少心配もしていた。

(83)~(85)の下線部の部分を程度副詞に変えてもやはり度数の読みは変わらない。しかし先ほども述べたが、単純な共起関係だけとて提出してみると(86)のように程度副詞の場合は度数読みはなされない。一方の(87)は当然ながら度数の解釈が適応される。

(86) 【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】走ッタ 【動きの量】

(87) 【シバシバ/何度も/数回/幾度か】走ッタ 【度数】

その他の条件を付加しない場合に程度副詞の方は度数の解釈をおこなうことができない。つまり程度副詞の度数解釈というのは副次的な機能だということが言える。それは(3)(3)'を見比べてもわかる。程度副詞が対象の数量を表す場合、それを量副詞(「タクサン」「イッパイ」など)で置き換えることが可能である。しかしこの場合その他の条件を付加しなくても程度副詞、量副詞が表すのは両者ともに対象の数量である。

(3) ゴ飯を 【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】食ベタ 【対象の数量】

(3)' ゴ飯ヲ 【タクサン/イッパイ】食ベタ 【対象の数量】

主体の数量を表す場合も、動きの量を表す場合も同じである。特別な条件を付加しなくても統語的な条件—つまりここでは共起する動詞の種類—のみで解釈が決まるのである。

(2) 人ガ 【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】イル。 【主体の数量】

(2)' 人ガ 【タクサン/イッパイ】イル。 【主体の数量】

(4) 昨日ハ 【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】遊ンダ。 【動きの量】

(4)' 昨日ハ 【タクサン/イッパイ】遊ンダ。 【動きの量】

ここまでのことを整理してみよう。まず、程度副詞が度数を限定する機能を持つことは確かである。それは少数ではあるが用例が見つかることによって担保されている。しかし度数の読みがなされるのは統語的、文法的な問題ではなくて意味的な問題である。また程度副詞が持つ機能としては副次的なものである。文脈上、度数の解釈以外の解釈が成り立たないときのみ、成り立つのだと考えられる。

しかし最後にどういう場合に「度数」の解釈が成り立ちやすいのかを指摘しておかねばならない。(88)を例にあげてみよう。

(88) ソノ街デハ、彼ヲかなり見カケタ。

まず(88)で「かなり」と共起している動詞「見かける」は他動詞である。ここまでの議論でいくと、程度副詞が他動詞と共起した場合には「対象の数量」を表す。しかし対象である「彼」には数量的な広がりが見込めない。そのため「動きの量」の解釈にずれ込むわけであるが「見かける」という動詞には動きの量的な幅が見込めない。それで最終的に「度数」の解釈に落ち着くのである。

もしこれが(89)のような場合だったらどうなるだろうか。

(89) ソノ街デハ、日本人ヲかなり見カケタ。

この場合、対象である名詞「日本人」に数量的な広がりが見込める。そのためこれはすぐに「対象の数量」を表しているのだと決めることができる。

(88)(89)からもわかるように、「度数」読みが成立するのは、これまで提示した「主体の数量」「対象の数量」「動きの量」の解釈にずれ込まない場合である。すなわち、主体や対象に数量的な広がりが見込めず、なおかつ動きの量的な幅も見込めない場合である。

佐野(2006)らが指摘する「一時点的な動詞」というのはそういう意味で動きの量的な幅も見込めないために多くの場合「度数」を表すと言えるが、その他の動詞であっても結局他の読みにならずに済むような構造になっていれば「度数」読みが成立するのである。佐野(2006)の「その動きが持続すると考えられる期間よりも長い期間を表す成分と共起した場合、繰り返される動きと捉えやすく、度数の解釈がしやすくなる」という指摘も、そういった成分と共起することによって結局は他の読みにならずに済む余地が少なくなるためであるのだと解釈できる。

他に採集した度数を表す用例を提示しておく。

- (90) 当時はアナログの時代でしたから、『デジタルオーディオなんて売れるわけがない』って随分言われました。
- (91) このなかの何章かは「君たちに」と、二人の息子への遺書のつもりで書いたんです。それをうっかり文藝春秋の人にいったら、ウチから出しますといわれて。おかげで名前を出された息子たちは読んでくれない(笑)。ずいぶん書き直しましたが、それでも文章甘いし、よくないですよ。
- (92) 城跡にも随分登った⁶⁾。

(90)は「言われる」という動詞に動きの量的な幅が想定できないため、(91)(92)は程度副詞と動詞の共起関係のみを見れば「動きの量」とも「度数」とも取れるが、文脈上の意味合いから「度数」の読みであると判断できる。

以上、程度副詞が「度数」を表す場合についてみてきた。これは「主体の数量」「対象の数量」「動きの量」を表す場合とは多少異なる。前後の文脈も考慮した上で、これら三つの読みがなされない場合にのみ「度数」を表すことができる。しかし、その絶対数は少なく、どちらかというと例外的・副次的な用法であると考えられる。

5. まとめ

数量限定場面において程度副詞が表すのは基本的に「主体の数量」「対象の数量」「動きの量」の三つである。これらはまず共起する動詞の種類によって分けられるが、「主体の数量」と「対象の数量」に関しては限定すべき位置にある名詞に数量的な広がりがある場合にのみ成立が可能で、想定しえない場合は「動きの量」に解釈がずれ込む。

主体の数量・・・意志性のない自動詞と共起し、主体である名詞に数量的な広がりがある場合。

6) (98)はこの文だけでは動きの量とも度数とも解釈できるが、文脈上度数の解釈が適応される。その文脈を提示しなかったのだが、あまりに長くなるためここでは割愛した。

対象の数量・…他動詞と共起し、対象である名詞に数量的な広がりが見出せる場合。

動きの量・…意志性のない動詞と共起し、主体である名詞に数量的な広がりが見出せない場合。

他動詞と共起し、対象である名詞に数量的な広がりが見出せない場合。

意志性のある自動詞共起した場合。

また、程度副詞が表しうる意味としては「度数」という解釈もある。しかし、これは用例の絶対数が少ない。そして共起する動詞のタイプからだけでは判断できず、前後の文脈を勘案する必要があることから副次的な用法であると考えられる。

度数・…前後の文脈を考慮した上で、「主体の数量」「対象の数量」「動きの量」の解釈がなされない場合。

本稿においては、程度副詞としてそれぞれの語(カナリ・ズイブン・ソウトウ・ダイブ・スコシ・チョット)をひとまとめにして分析をおこなったため、論理に多少荒らさがあるのは否めない部分である。詳細な分析にはそれぞれの程度副詞の用例を細かく検討することが求められるだろう。ただ、これまであまり言及されてこなかった程度副詞の数量限定の解釈の違いが生まれる要因についてははっきりと言及することができたことに関しては一定の成果が得られたと考えられる。

【参考文献】

- 井本亮(1999)「「ほど」構文の解釈と主文の有界性について—述語動詞句の動詞分類を中心に—」『筑波日本語研究』4
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 北原博雄(2013)「量修飾の可能性と、被修飾句のスケール構造の違いに基づいた、現代日本語の程度副詞の分類」『国語学研究』52
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
- 佐野由紀子(1998)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3
- _____ (2006)「動きに関わる量について—量的程度副詞と動詞との共起関係から—」『高知大国文』37
- _____ (2008)「「程度差」「量差」の位置づけ—程度副詞の体系についての一考察—」『高知大国文』39
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 森田卓郎(1985)「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20

【用例抽出】

国立国語研究所「KOTONOH」現代日本語書き言葉均衡コーパス(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)」

논문투고일 : 2014년 06월 10일
심사개시일 : 2014년 06월 20일
1차 수정일 : 2014년 07월 09일
2차 수정일 : 2014년 07월 15일
게재확정일 : 2014년 07월 20일

 <要旨>

程度副詞が持つ数量限定機能の解釈について

程度副詞には後接する成分の数量性を限定する機能がある。その程度副詞の表す数量性—つまり解釈—は多岐にわたるのであるが、本稿はその解釈の違いを生じさせる要因は何かについて調べたものである。調査の結果、以下のような結論を導くこととなった。

主体の数量…意志性のない自動詞と共起し、主体である名詞に数量的な広がりが見込める場合。

対象の数量…他動詞と共起し、対象である名詞に数量的な広がりが見込める場合。

動きの量…意志性のない動詞と共起し、主体である名詞に数量的な広がりが見込めない場合。

他動詞と共起し、対象である名詞に数量的な広がりが見込めない場合。

意志性のある自動詞と共起した場合。

また、先行研究でたびたび論じられる「度数」を表す用法については、用例の絶対数が少なく、前後の文脈の影響を受けることから、例外的・複次的な用法であるとした。

A study of qualification of quantity in degree modifiers

Degree adverbs have a function which modifies the quantity. When degree adverbs modify the quantity, they express some various meanings. this paper research about the factors of making various meanings. And this paper got the following conclusion.

Quantity of a subject ... When it coincides with an intransitive verb and a quantitative spread can be assumed to the noun which is at the subject.

Quantity of a target... When it coincides with a transitive verb and a quantitative spread can be assumed to the noun which is an object.

Quantity of a motion ... When it coincides with an intransitive verb and a quantitative spread can be not assumed to the noun which is at the subject.

When it coincides with a transitive verb and a quantitative spread cannot be assumed to the noun which is an object.

When it coincides with an intransitive verb having will.

A few “frequency” usage were found . And in order to identify “frequency” usage to get the meaning of a word from its context. so this usage is exceptional one.